残 像 抄 (8)

『芳名録』より —A.ブランデージさんのおもいで—

大和文華館 館長 石 澤 正 男

左から、石澤現館長、故矢代前館長、故ブランデージ氏

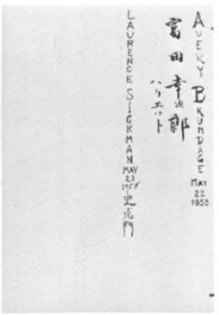
前号で一部御紹介した『芳名録』は、開館前から開館後に跨った過渡期的なものであります。然し、大和文華館の建物が次第にできつつあり、そして遂に竣功して華々しく開館された時期にわたっていますので、この変則的な『芳名録』には皇族を始め内外の著名な人々の御署名や、それに添えられた感想文や印象記ともいうべきものに興味深いものが少なくありません。例えば、前号で御紹介したアリソン駐日米国大使や竹内栖鳳研究で来日したエレン・プセッティ女史(今のセオドーア・コナント夫人)に続く頁を繰るだけで、6人の外国人の署名があり、その中には現在西ドイツのハンブルグ市の東亜美術工芸博物館の東亜部長ローゼ・ヘンペル博士、現在アメリカのボストン美術館長兼アジア美術部長の要職にあるオランダ出身の東洋美術史学者ヤン・フォンテイン(Jan Fontain)博士(当時はアムステルダムの国立博物館勤務)がロンドン大学の東洋美術史担当教授ウィリアム・ワトソン博士(当時は大英博物館勤務)と同行されたと見え、並んで署名されています。次の頁には最上段に特色のある流麗な書体でアヴェリ・ブランデージ氏(Avery Brandage 1887～1975)の署名が見られます。この辺の数頁には一頁に少くとも拾数人の横文字の署名が並んでおり、その中には吾々と親しい人々が半数以上はおります。少々多すぎるので省略し、二頁飛ばしたところに、これはまた珍らしく、前記のブランデージ氏が毛筆の竪書きで署名され、最後に1958年5月22日と英文で書き添えられています。それと並んで1931年以来ボストン美術館アジア美術部長の重責を負われていた、岡倉天心最後の門人といってよい京都出身の富田幸次郎先生(1890～1977)が立派な漢字で署名されているのも、私の知っている限りでは稀な例ですが、傍にハリエット夫人も毛筆で署名されています。その翌日訪問されたハーヴァード大学出身でウォーナー門下の俊秀として聞えているローレンス・シックマン博士(1907～　)も右の例に倣って毛筆の竪書きで署名され、終りに漢字で「史克門」とシックマンの支那音の宛字が書かれています。シックマン博士は長らくカンサス・シティにあるW・R・ネルソン美術館々長の地位にあり、中国美術史、特に書画に造詣の深い学者です。二、三年前に優退されたと聞きました。

ブランデージ氏は国際オリンピック会長を長らく勤められ、1964年の東京オリンピック大会の実現には大いに尽力された方ですから日本人にはスポーツの世界を通じてよく知られております。然し同氏がアジア諸国の美術品の大蒐集家であったことを知る日本人は比較的少ないようです。氏の事業の本拠地はシカゴ市でしたし、その関係でシカゴの美術館(The Art Institute of Chicago これは常設美術館であると同時に美術全般の実技ばかりでなく演劇部門も含む研修機関であります)の東洋部にはブランデージ・コレクション中の特に優れた中国古銅器がいくつも陳列されていました。そんなことから吾々は漠然と、ゆくゆくはブランデージ・コレクションはシカゴの美術館に納まるものと想像していたものでした。ところがサン・フランシスコ地域(市と郡)を中心とする美術愛好家の間に熱烈なブランデージ・コレクションをサン・フランシスコ市に誘致しようとする運動が起こり、その目的達成のために地域の有力者が集まって強力な受入態勢が作られました。その結果サン・フランシスコのゴールデン・ゲート公園内に以前から建てられていたM.H.De ヤング記念美術館に隣接して新館を建て「サン・フランシスコ・アジア美術館—アヴェリ・ブランデージ・コレクション」と命名されて1966年6月、開館式が行われました。ついで9月には「アジア美術国際シンポジューム」が盛大に開催され、欧米の著名な専門家とともに日本からも多数の専門家が御招待を受けて出席しました。私も招待された一人ですが、その時のブランデージ氏はいかにも張り切っていて幸福そうでした。

北アメリカの太平洋岸はアジア系住民が他の地方に比較して最も多いのですが、東洋美術の優れた蒐集を持つ美術館は長らく皆無の状態でした。1933年にリチャード・E・フラー(Richard E. Fuller 1897～1976)博士が母堂マーガレット夫人の援助を得て、シアトル市のヴォランティーア公園内に設立されたシアトル美術館(Seattle Art Museum)の出現によって漸く美術に関心をもつ人々の注目を惹くようになったのでした。

1953年1月から同年の12月にかけてアメリカの五都市を巡回する日本古美術展が日米両国の周到な協約の下に開催されました。その前年にはアメリカ側から三人の錚々たる東洋美術史専門家、すなわち一般に奈良・京都をB29の爆撃から救った中心人物とされているラングドン・ウォーナー翁(『美のたより』40～42号に掲載の「ウォーナー塔碑の建立」参照)を団長格とし、ワシントンのフリーア・ギャラリー館長アーチボルト・ウェンレイ氏、ニューヨークのメトロポリタン美術館極東部長アラン・プリースト氏が来日して日本側と出品物の交渉を重ねたのですが、アメリカ側は「ドリーム・リスト」と称する、日本美術の超特級品を網羅したものを秘かに用意していました。もちろんアメリカ側の希望通りにはゆきませんでしたが、その後国内でも移動禁止になっている国宝中の国宝が多数含まれた未曽有の豪華な内容の展覧会が実現しました。

この展覧会の開催地と会場はアメリカ側で選定したのですが、首都ワシントンのナショナルギャラリー・オブ・アートを第一にし、しかも開会をアイゼンハワー大統



『芳名録』('58-5-22)

ブランデージ氏のグリーティングカード
(国際オリンピック委員会会長時代)

領の最初の大統領就任式が挙行されてワシントンがアメリカ国民の最大の祭典で沸きかえっている時にあてられました。第二会場はニューヨーク市のメトロポリタン美術館、第三会場となったのが太平洋に面したシアトル市のシアトル美術館、第四が前述のシカゴ市の美術館で、最後の五番目がアジア美術全般として見れば世界最高の宝庫というべきボストン市の美術館でした。私は主席随員としてこの展覧会に随伴して14箇月余りアメリカに滞在し、心身ともに消耗しましたが、また貴重な経験と多くの知友をえたことは申すまでもありません。ブランデージさんに初めてお目にかかったのもこの時で、シカゴ滞在中は厚遇に浴しました。この旅行中握手を交わしたアメリカ人は恐らく数千人は下らぬかと思いますが、その中で今でも忘れえぬ握手の感触とでもいうものを受けた人物が二人あります。どちらも社交界で洗練された立派な紳士ですが、その一人はボストン美術館幹事であったマクラナサン氏です。もう一人はブランデージさんですが、その手は大きく、骨太で、肉が厚く、しかも軟かで、軽く握られているのに、がっしりとした動かぬ型の中にこちらの手がすっぽり包まれてしまったような感じが伝わってくるのです。ブランデージさんはオリンピックの選手だったと聞いていましたから、どの競技のチャンピョンだったのですか、とお尋ねしたら「五種競技です」と答えられました。それにつけ加えて「今は十種競技に変わって、五種競技は廃止されました」といわれたのを覚えています。

リチャード・E・フラー博士とその母堂の善意の結晶というべきシアトル美術館がシアトルの緑美しいヴォランティーア公園に建てられてから丁度33年後れて、ブランデージ・コレクションがサン・フランシスコのゴールデン・ゲート公園のデ・ヤング記念美術館に隣接して建てられた美術館に納められたことは、前述の通りですが、もし1950年以前にそれが実現されていたならば、太平洋岸のもう一箇所で、今ではもはや二度と実現される可能性のない優れた内容の日本古美術展が開催されたであろうと想像するのは私一人ではないでありましょう。それはさておき、アジア系市民の最も多いカリフォルニア州の重要な中心都市であるサン・フランシスコ市にブランデージ・コレクションが厳然と構えているのは、あの熱烈なアジア美術の愛好家であり、一方終始オリンピックにアマチュアリズムの貫徹と人種差別の撤廃を主張した偉丈夫に最もふさわしいモニュメントとなっているように感じられます。

('81-1-26)

季刊 美のたより No.54
昭和56年2月25日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.